

FACE

VOL.005 2020.10

社会医療法人友愛会をかたちづくる人々



新生 友愛医療センターのER

新生

友愛医療センターの ER

地域の
セーフティネットとして。

2020年8月、豊見城中央病院は友愛医療センターへの移転を完了した。

多くの診療科と同様、移転を機にERもその機能と体制を大きく拡充し、新しく生まれ変わった。

新生・友愛医療センターERとは一体どのようなチームなのか、そしてどのような未来を目指すのか。

インタビューを通して紐解いた。

挑戦が始まる。

私が医者になろうと決心したのは、小学校5年生から2年間、アフリカのケニアに住んだことがきっかけでした。当時の私は地元の福岡を出たことのない、ただの田舎っ子でした。それがある日、JICA 専門家として父がケニアに派遣され、私たち家族も一緒に引っ越すこととなったのです。初めての海外であるケニアに到着して何より衝撃だったのは、現地で目の当たりにした大変な貧困や劣悪な生活環境でした。快適で清潔な日本とは全く違った環境の中、路上やゴミ捨て場に住み、食事すらままならない現地の人たち。この人たちは、病気になったら一体どうするのだろうか。病院には行けるのだろうか、この人たちを守ってくれる医療体制はあるのだろうか、そして、この人たちは自分の大切な人をどうやって守るのだろうか。こんな厳しい環境にある人たちを何かの形で救いたい、そのために医者になりたい。そんな思いが、まだ子供だった私の心に深く刻み込まれました。これまでの私の人生には多くのきっかけや転機がありましたが、多感な時期にケニアに住んだことは、私の人生を大きく変えた一番の転機でした。

日本へ戻ってからもその思いを抱き続けた私は、様々な苦労はありましたが、なんとか医学部に進学することができました。学生時代、当時アメリカで大ヒットしていたドラマ「ER」の影響で救急に対する漠然とした憧れを抱いてはいたのですが、そんな想いを決定的なものにする出来事がありました。それは父の死でした。

父は私とは違い大柄、仕事の傍ら本格的に登山をするような逞しい人間で、子供の頃から私の憧れの存在でした。そんな父が登山中に突然倒れたのです。場所は山頂に近い登山道で、当時まだほとんど飛んでいなかったドクターヘリにも要請がかかったのですが、ドクターヘリではホイストができないため

救急科医長

YAMAUCHI

Sunao 山内素直

新生

友愛医療センターのER

消防の防災ヘリが出勤し、結果的に救急隊の接触までかなりの時間がかかり、病院に運ばれた頃には時すでに遅く、残念ながら父は帰らぬ人となってしまいました。診断は「熱中症」でした。当時私はまだ学生で、大学のあるつくばにいたため、最期に立ち会うことができませんでした。失意の中、書類の手続きのため搬送先の病院を訪ねると、父を担当してくれた先生がその時の状況を丁寧にお話してくださいました。そして先生はこう言いました。「君のお父さんは残念だった。でもドクターヘリが普及すれば助けられる人がきつと、もっと増えるはず」。

父の死は、私の人生の中で最も辛い経験の一つです。私のような悲しい思いをする人を少しでも減らしたい。この時、私は救急医になること、フライトドクターになることを固く決意しました。

大学卒業後、救急に力を入れていて、ドクターヘリにも早くから取り組んでいた浦添総合病院を初期研修先を選びました。当時、浦添に集まっていた仲間たちは皆やる気に満ち溢れ、非常に充実した日々を過ごしました。後期研修も浦添総合病院に残り、3年目からは念願のフライトドクターとして立ち立つことができました。



夢を叶えてフライトドクターとなり、充実した日々を送っていた自分がどうして急にアメリカを目指すことになったのか。それはある一人の患者さんとの出会いがきっかけとなりました。彼の名前はロニー。アメリカ軍属の少年で、出血性ショック、TBI、両側血気胸、脾損傷、横隔膜破裂、骨盤骨折などを併発した重症多発外傷で、搬送された時には瀕死の状態でした。そして3度

の手術、術中心停止、敗血症性ショックなどなど、非常に不安定な経過を辿りました。私はまだ重症外傷のマネジメントの経験がなかったため手探り状態でしたが、彼を担当していた1ヶ月間、在沖繩米海軍病院の先生や日本人インターンと毎日のように連絡を取り合い、アメリカからやってきた家族のケアもしながら、懸命に彼を治療し、ようやく嘉手納基地から空軍機でアメリカへ搬送できる状態にまで安定させることができました。

その数ヶ月後、すっかり元気になったロニーと彼の家族とアメリカ・ミズーリ州で再会しました。沖縄で生死の淵を彷徨った彼がこんなに元気になったこと、それを支えた家族の深い愛に心から感動しました。そして、医師としての自分の存在意義、責任、誇りを強く意識したのです。また彼の回復は、この世の中やってやれないことなんてないという事実気づかせてくれ、それと同時に、Comfort Zoneから飛び出して新たなことに挑戦しなさいと、現状に満足していた自分の背中を押してくれたような気がしました。そして私は、かつて憧れた本場アメリカのERで救急医となることを決意しました。うまくいかなくても、失敗してもいい。ただ、現状に満足して、このまま何も新しいことに挑戦せず、後悔する人生にはしたくないと思ったのです。

振り返ると、アメリカ行きの挑戦は私にとって人生で最も困難な挑戦でした。当時、私は医師3年目。救急科後期研修医として勤務する傍らでコツコツと勉強をしながら在沖繩米海軍病院、東京ベイ浦安市川医療センターを経て、2015年によりややくアメリカの大学病院での救急レジデンスへと進むことができました。救急レジデンスを修了したあとは、以前から興味があった災害医療やプレホスピタルをもっと専門的に学ぼうと、フェローシップに進みました。昨年はERで指導医として働きつつ、自分でドクターカーを運転して現場に駆けつけて救急隊員と一緒に活動したり、州や連邦政府の警察やSWAT隊、麻薬取締局と一緒に現場に赴いたり、また患者の国際搬送のために世界中を飛び回ったりと、救急専門医として貴重な経験を積むことができました。

アメリカのERは、保険制度などの関係から重症度や疾病の種類などにかかわらず駆け込める場所と位置付けられています。心肺停止や外傷はもちろん、緊急性の全く高くない疾患も、小児も高齢者も、眼科も耳鼻科も、産婦人科の患者さんも、そして病気ではない患者さんもやってくる。そこは、まさに多様性に富んだアメリカという国の縮図でした。そんな中で、どんな方でも



“General minded ER physician”として、すべての人々を受け入れたい。

分け隔てなく受け入れ、そのバックグラウンドを理解し、適切な治療を行い、必要な専門家へ繋ぐ、もしくは正しい道筋を提供する。一刻を争うような救急疾患に的確に対応でき、それでいてマイナー科目も含めた幅広い疾患領域にも対応できる知識と技術をもったジェネラリスト。それがアメリカの救急医です。

そんなアメリカで約6年、多くのことを学び、私は救急医としての自分の確固たるビジョンと次なる挑戦を心に抱くようになりました。私の救急医としてのビジョン、それは“General minded ER physician”であれ、ということです。救急医である私は、手術ができるわけでも、カテができるわけでも、内視鏡ができるわけでもない。いわゆる手に職をつけた医師ではありません。しかし、どんな人にも、どんな疾患にも、いつでも正面から向き合い、適切に初期対応をし、専門の先生に最善の状態でバトンタッチできる医師、すなわち“General minded ER physician”でありたいのです。そして、そんな“General minded ER physician”を数多く育て、彼らが生きがいを持って楽しく働くことができるERを日本に作りたい。それが私

の次なる挑戦です。その挑戦の場所として、私は沖縄県豊見城市の友愛医療センターに入職しました。

今年8月に開院した友愛医療センターのクリティカルケア部門は充実した施設を備えるものの、救急医の数は決して多くありません。しかし、責任者である玉城正弘特命副院長や高江洲秀樹救急科部長をはじめ、想いを共有する多くのスタッフがいます。また、診療科の垣根を超えてとてもフットワークが良く協力的、かつスキルの高い先生方やスタッフがいます。さらに、素晴らしい教育環境の中で非常に優秀な研修医が育っています。私たちはチーム友愛とも言うべき強い絆を結び、地域の救急医療に日々携わっています。そして私たちが追い求める救急像、つまり重症の内科疾患や外傷だけにフォーカスするのではなく、老若男女、疾患領域を問わず、社会的な問題を抱えている患者さんにもきちんと対応できる、地域の全ての方々にとってのセーフティーネットとなるような救急の実現に向かい、挑戦の第一歩を踏み出したところです。たやすく実現するとは思いません。しかし、私たちは前へ進んでいきます。(了)

看護師長

本永隆

MOTONAGA Takashi

このチームで、自分にできることは何か。

邊士名朝博

HENTONA Tomohiro

救急看護認定看護師

友愛医療センターERは「ことわらない救急」を目指し、一次から二次、そして当院で対応可能な症状であれば三次救急まで、非常に広範囲に渡る患者さんを受け入れています。

より多くの患者さんに我々の医療を提供するため、新病院への移転を機に大幅に拡充した設備を活かし、将来的には三次にもしっかり対応できる救急医療を目指したい。そのためには体制をさらに強化する必要があります。まずは

教育。良い人材を育成するため、一人ひとりが置かれた様々な状況に目を配り、すべてのスタッフがモチベーションを高く持ち続けながら、スキルを向上させ、さらには充実した生活もきちんと送れる職場環境を実現する、それが管理職としての私に与えられた重要な責務です。そして友愛医療センターERスタッフの成長が、地域医療への貢献につながると考えています。

今年、当院ERは設備、体制が大幅に強化されました。加えて、私たちのチームワークは非常に強固です。私たちは、このチームで沖縄でも有数と言われるような救急を実現したいと真剣に考えています。そのため私は、ハイブリッドERが稼働したときにスムーズな運用ができるよう、認定看護師として準備を進めていきたい。また災害拠点病院として地域住民からの信頼をさらに高めるため、DMATのイン

ストラクターを目指します。

私は、友愛医療センターは50年後、100年後も地域に貢献できる病院だと思っています。なぜなら、私たち友愛会の理念である「友愛の心で人間性豊かな職場環境をつくり、健康づくりに寄与する。地域医療に貢献する」の実現のために、ERはもちろん事務方まで含めた院内の全スタッフが一丸となることができるから。この病院なら、それが可能なのです。

— 新生

友愛医療センターのER

このERはとにかく、人が素晴らしかった。首都圏の病院から来た私をすぐに受け入れてくれて、一から全てを丁寧に教えてくださいました。その温かさに感動して以来、ここで勤務を続けてもう12年。2度の産休時にも、気持ちよく祝福してくれました。そんな温かさ、懐の深さは患者さんの受け入れに関してもよく現れていて、一般的な2次救急では難しいだろうと思うような症例も断らず、様々な患者さんを幅広く受け入れる日々大きなやりがいを感じています。

今年、設備が大幅に充実し、医師の数も増えるなど、より多くの患者さんを受け入れる体制が整いました。スタッフ間のコミュニケーションもますます緊密になり、ERはチームとしての力を強化し、非常に活気に溢れています。この素晴らしいチームがそれぞれにスキルを高め、今後はさらに重症の患者さんをもっと受け入れられるよう、全員でチャレンジしていきたいと考えています。



境真理

看護師

SAKAI Mari



仲里玲哉

救急救命士

NAKAZATO Reiya

人の役に立ちたいと思い、消防士を目指していましたが、当院の前身である豊見城中央病院での研修を通じて当院の医療活動に携わりたいと考えるようになり、学校を卒業した今年3月、当院の救急救命士になりました。

救急車の受け入れ時にはもちろん、ドクターカーにも同乗して現場に駆けつけて真っ先に患者さんに向き合い、チームとともにその後の治療にも携わることができるなど、ER所属の救命士であることに大変なやりがいを感じています。

当院のERは雰囲気がとても良く、職種間の垣根が全くありません。まだ入職したばかりの私でも本当に働きやすい、この恵まれた環境の中で救急救命士としてのスキルを磨き、将来はDMATの取得、ドクターカーのさらなる強化や救命士の育成、院内外でのBLS講習活動などにも取り組み、地域の救急救命に貢献していきたいと考えています。

新生

友愛医療センターのER

豊見城市消防本部
消防士長

赤嶺 健太

AKAMINE Kenta

友愛医療センターは、前身の豊見城中央病院の時代からフットワークが良くとても協力的な病院です。ドクターカーを要請すれば必ず来てくれて、現場で高度な処置を的確に行ってくれる安心感があります。おかげで豊見城の救命率は高まりました。

そして、新病院開設に際しては救急ワークステーションを設置し、私たちが院内に受け入れてくださった。医師を始め病院の方々から教えていただきたいことはたくさんあります。救急ワークステーションの運用を通じて、様々な教育研修を受けさせていただくことで、ALSを想定したBLSを的確に行えるようになるなど、病院と密接に連携した救急隊としてのスキルアップを図りたい。さらに、救急WSのある豊見城市西部地区は近年開発が進んで大規模な建築物が多く、この場所から私たちが救急出動できることで、さらに多くの患者さんの命を救えるようになることを期待しています。

個人的には、チームの皆さんと食事など業務以外の交流を通じて信頼関係をさらに深められることも楽しみにしています。



薬剤師

平識 善彦

HESHIKI Yoshihiko

ER配属の薬剤師は、もしかしたら全国的にも珍しいかもしれません。ましてや2次救急病院では。薬剤師として、受け入れた患者さんの症状について薬学的観点から分析したり、投薬歴を踏まえた適切な薬剤や投与方法を検討するなど、ERチームの一員として医師を始め多くのスタッフと共に治療にあたることができる立場に、私は大変なやりがいを感じています。

初療室と救急病棟で刻一刻と状態が変化する多くの患者さん一人ひとりを診ることは決して楽ではありませんが、多職種間の垣根が無く、チームとして非常に良く連携している当院のERは本当に働きやすく、毎日が充実しています。このチームに必要とされる、頼られるメンバーとなるため、これからも日々勉強を重ねていきます。

診療放射線技師

當銘 一輝

TOUME Kazuki

大きな装置を動かして病気を可視化できる放射線技師に憧れ、急性期で多くの症例に触れたいと考えて、友愛医療センターに入職しました。こちらは外科内科ともにとっても強く、さらにはドクターカーやヘリポート、またハイブリッドORなど設備が充実していて、様々な患者さんを受け入れることが可能です。将来的にはハイブリッドERも導入が予定されるなど、さらに高度な医療を提供できることにワクワクしています。

私は診療放射線技師になってまだ2年目なのですが、オーダーされた部分のみならず広い視野で患者さんの症状を考えて、チーム医療に貢献できるようになりたいと考えています。

当院ERの素晴らしい点、それはチームワークです。互いを尊重し、信頼し、意見が違ってもしっかり議論して理解し合い、全員が一丸となって日々の業務にあたっています。そして、ものすごくポジティブ。だから、困難や新しいことに直面しても、私も迷うことなく前へと進むことができます。

普段はとても和気あいあいとした雰囲気なのですが、入電すると全員が一瞬でプロフェッショナルに変わる。あの瞬間がたまりません。この素晴らしいチームの一員として、先生方を始めチームが取り組みたいこと、目指したいことを実現するために支えていきたいと思っています。

看護助手

金城 真由美

KINJO Mayumi

対談

友愛医療センターが 目指すER像



救急科医長

山内素直



玉城正弘

クリティカルケア担当特命副院長



山内 昨年、私が勤務していたアメリカ・ニューヨークまで玉城先生が来られて非常に嬉しかったです。

玉城 山内先生には絶対に当院へ来ていただきたい、その一心で口説きに行きました(笑)そして3日間、友愛医療センターERの未来について語り合いましたね。ジェネラルマインドを持ったスペシャリストとして、地域のセーフティーネットの役割を果たすERにしていきたいと。

山内 それは私が抱くER像そのものでした。あの日、私は友愛医療センターへの入職を決意したのです。

玉城 私も、ニューヨークで山内先生と語り合った3日間で、先生の真摯な人柄にも触れる事ができました。私が特に感銘を受けたのは「友愛医療センターにERのファミリーを作りたい」という先生の言葉です。そんな事を言う先生はなかなかいない。感動しましたね。

山内 ERはチームワークが重要です。医師、看護師、救命士、技師、薬剤師、それを支えるスタッフと、全てのメンバーが信頼しあい、モチベーション高く、働きやすい環境である事、これが良いチームワークに必要なだと考えています。それが実現した状態をファミリーと例えたのですね。

玉城 先生は今年4月に来ていただきましたが、ERは既に

ファミリーのように強い絆で結ばれている。

山内 実は入職してすぐに沖縄でもCOVID-19の感染が急激に拡大し、私たち友愛ERも大変なスピードで対応を迫られました。1ヶ月が1年にも感じられるような密度の濃い日々を過ごす中で、必然的にチームワークが強くなったのかもしれない。

玉城 神経を擦り減らすCOVID-19対応が続いていますが、チーム全員が前向きであり続けることができるのは、素直先生の人柄に依るところも大きい。今後、地域のニーズがあれば当院ERの機能をさらに高度化する事も必要と考えていますが、そのためにはチーム一丸となった準備が求められますので、現場のリーダーとなる先生の素晴らしい人柄は当院に来ていただいたかった大きな理由の一つです。

山内 将来の高度化に備えるため、チーム力の強化とともに、研修医の教育もしっかり行なっていきます。来年は、当院の初期研修医のER入職や、複数の病院から後期研修医が交流に訪れる予定もあります。新たな風を取り入れながら、“General minded ER physician”として、地域の全ての方々にとってのセーフティーネットになるというビジョンを共有できる仲間を増やし、ともに挑戦していきます。(了)

我が友愛医療センターの特徴は、そのチームワークの素晴らしさです。すべての職種、診療科、全職員がその垣根を軽々と越えて患者さんのためにベストを尽くすことを惜しみません。我がERは、そんな当院の特徴を縮図のように体現しています。ERチームはもちろん、全病院内から診療科の垣根を越えてスタッフが集結し、患者さんに必要なことを常に先読み、職種を超えて対応し、全員が有機的に連携して治療にあたります。そのモチベーションの高さとスピード感、そして軽やかさは、時に私の想像を遥かに越え、しばしば圧倒され、感動すら覚える毎日です。

今年新たに開院した友愛医療センターは、地域の救命救急へのさらなる貢献を目指してERの機能を大幅に高めています。面積を従来の5倍に拡大して新たに救急病棟を開設、沖縄最大級の屋上ヘリポートや感染症等への対応が可能な陰圧・陽圧機能の設置、将来のハイブリッドER運用を見据えたスペースの確保などのハード面はもちろん、ソフト面でも救急ワークステーションを通じた消防署との連携強化、専属の薬剤師や救急救命士の配置、そしてアメリカから救急医・山内素直先生を迎えました。素直先生は豊富な経験とスキルを持ち、さらに“地域のセーフティーネット”という救急観を掲げておられ、それは我が友愛医療センターが目指す“地域のすべての方に貢献する”という目的と大いに一致しています。

新たな設備と仲間、そして素晴らしいリーダーシップを手に入れた我が友愛ERチームの今後には是非ご期待ください。

未来へと動き始めた 友愛ER。

救急科部長

高江洲秀樹

編集後記

取材中、誰もが口を揃えたのは、友愛ERのチームワークの非凡さである。クリティカルケア部門トップの玉城特命副院長や高江洲救急部長以下すべてのERスタッフが、さらには他診療科からも、患者を救うという一つの目標の下に集結し、チームの一員として職種を越え、フラットな立場で連携して治療を行う。その現場のスピード感、使命感の強さを目の当たりにし、終始圧倒された。今年、設備を大幅に増強、また米国から新たなリーダーシップを迎え、地域のセーフティーネットとして機能、体制のさらなる高度化に挑戦する友愛ERチーム。沖縄・豊見城の地に、新たなER像が確立される日も遠くないと感じた。(和田)



社会医療法人 友愛会

〒901-0224 沖縄県豊見城市字与根50番地5
TEL.098-850-3811 FAX.098-850-3810

広報誌フェイス
発行人／比嘉國郎
編集／広報誌編集委員会
印刷／株式会社 東洋企画印刷



友愛医療センターHP



臨床研修医HP